

自分に自信をもち、主体的に物事にとりくむ生徒の育成
～グループ通級の活動を通して～

- 1 研究のねらい
- 2 研究の方法
- 3 第1次授業実践
- 4 第2次授業実践
- 5 通常の学級での様子
- 6 研究のまとめ

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

尾張地区・三河地区・名古屋地区合わせて14本のレポートが提出・報告された。その内容から、各地区・各単組において日頃から熱心に授業研究にとりくみ、自主的な研究活動が推進されていることが明らかになった。

2 本次教研で論じられた主要な課題

(1) 討論の柱

「豊かに生きるための力を育む」を中心テーマとし、3つの柱立て「学習指導をどのようにすすめるか」「人とかかわる力を育てるための指導」「特別支援教育をどのようにすすめるか」に沿った報告にもとづき議論を行った。

(2) 「学習指導をどのようにすすめるか」

各教科や自立活動の指導において、児童生徒の日常の様子を観察したり、発達検査などの結果を活用したりして、児童生徒の得意と不得意を把握することの必要性、また、それを分会全体で把握することの大切さについて確認した。また、児童生徒が主体的に学習にとりくみ、理解を深められるように、自己決定ができる場や、協働的な学びの場を設定すること、できたことを的確にほめて評価することの重要性について確認した。

(3) 「人とかかわる力を育てるための指導」

通常の学級との交流及び共同学習や、地域との連携など、児童生徒が人とかかわる機会を確保することの重要性について確認した。その中では、オンライン会議システムを活用したとりくみも紹介された。児童生徒が自らの苦手を克服するのではなく、それぞれの得意をいかしたかかわり方を意識することができるようにすることや、休み時間や遊びの中など、児童生徒が安心して、自然とかかわることができる場を設定することが大切であることを確認した。

(4) 「特別支援教育をどうすすめるか」

通常の学級に在籍する児童生徒の困り感に寄り添い、合理的配慮を提供するために日常的に児童生徒の実態を共有すること、専門家の意見を取り入れることの重要性について確認した。その中で、発達障害通級指導教室の意義についても共有することができた。

(5) まとめ

「豊かに生きるための力を育む」ため、各教科の指導はもちろん、自立活動の指導や、特別支援教育をこれまで以上に推進することの必要性について確認することができた。

3 第74次教研にむけた課題

各単組、分会において今後も研究をすすめるとともに、次の内容についても、さらに意識できるとよい。

(1) キャリア教育の視点を取り入れた実践

(2) ICTを効果的に活用した実践

(3) 児童生徒が主体的に学びにむかうことができる実践

(杉山由佳・久賀弘太郎)

報告書のできるまで

第73次教育研究愛知集会は、10月21日に対面で開催された。特別支援教育部会を推進するにあたっては、前回までの教研における成果と課題をふまえて、「豊かに生きるための力を育む」を中心テーマとした。討論では、「学習指導をどうすすめるか」、「人とかかわる力を育てるための指導」、「特別支援教育をどうすすめるか」という三つの柱に分けて行い、実践について交流を深めた。

この報告書は、県集会での討論内容及び、助言者の指導を経て作成したものである。

助言者	杉山 由佳（愛知県医療療育総合センター中央病院）	
	久賀 弘太郎（名古屋・南特別支援分校）	
教育課程研究委員	田口 孝典（海部・永和小）	田中 洋樹（名古屋・天白特別支援）
	近藤 奈歩（名古屋・西特別支援）	森 はるか（名古屋・有松小）
	佐藤 清則（一宮・三条小）	湯浅 直子（尾北・岩倉南小）
	今泉 真則（新城・鳳来中部小）	松田 優佳（岡崎・美川中）

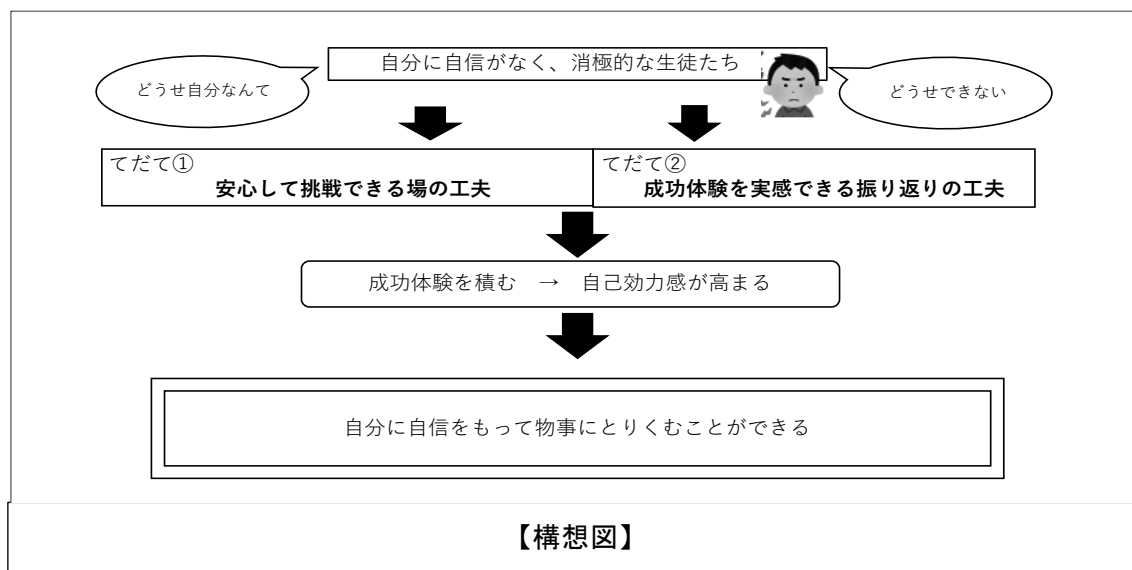
1 研究のねらい

わたくしは、自信をもって主体的に物事にとりくむ生徒を育てたい。複雑で予測が難しい世界を生き抜くためには、目標を設定し、振り返りをしながら、責任ある行動をとる力である「生徒エイジェンシー」(OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030. 2019年)を發揮することが必要であると言われている。これは「子どもたちは自分の人生や周りの世界をよくする意思をもっている」というOECDの考えに基づいている。変革を起こすために、生徒自らの行動で自分や自分の周りをよりよい方向へ変えることができるという自己効力感を高めることが、これからの未来を生きる子どもたちには必要なことだと考える。

本校発達障害通級指導教室(以下通級指導教室)に在籍するAとBは、「自分なんて」「どうせできないから」「自信ないです」など活動のはじめから自信がない発言をすることが多い。さらに授業やグループ活動に消極的で、自分の意見がいえなかったり、思いや考えをみんなの前で発言することが難しかったりする姿がみられる。その要因として、安心して発言をすることができる環境でないことや、成功体験を積み重ねて自信をつけることができていないことが考えられる。

本校では、月に数回、通級指導教室に通う生徒の中の希望者が参加する「グループ通級」という活動を行っている。グループ通級では、一つから二つのゲームをみんなで協力しながら楽しむことを通して、コミュニケーション能力を高めていく活動を行っている。2人の生徒は、毎回参加し、楽しんで活動にとりくんでいる。自ら発言する姿もみられるようになり、グループ通級の場合、彼らの安心できる場になってきている。また、本年度の第1回グループ通級では、授業のはじまりのあいさつを希望制にしたところ、AもBも立候補して、代表として積極的にあいさつをすることができた。グループ通級という場が、彼らにとって自分の力を引き出す絶好の場であると感じた。

そこで、本研究では、グループ通級の活動において、安心して挑戦する場を設定して、主体的に活動にとりくむことができるようにしたり、活動の振り返りを工夫して成功を実感できるようにしたりしていく。与えられた役割を果たし、客観的に振り返ることで、「自分はできる、役に立っている」という自己効力感を高めて、自分に自信をもつことができるようになることを考え、図のような構想で研究にとりくんだ。



2 研究の方法

(1) 対象 発達障害通級指導教室に通う2人（以下A・B）

(2) 生徒の実態

生徒	実態
A	<ul style="list-style-type: none">○ グループ通級では、ムードメーカーとして周りを明るくすることができる。○ 発言が聞きとりにくいことがある。○ 「どうせ無理」「できないから」などのマイナスな発言が多い。○ 周りとかかわる場面で、意見を求められても、発言することが難しい。
B	<ul style="list-style-type: none">○ グループ通級では、1・2年生に優しく接している姿がみられる。○ 伝えたい気持ちは強いが、うまく言葉で表現することが難しい。○ 説明する時、一文が長くなり、最終的に何が言いたいのかわからなくなる。○ 伝えたいことが話したい人に伝わらないことがよくある。○ 自ら周りとかかわることはせず、一人でいることが多い。

(3) めざす生徒像に迫るためのてだて

① てだて1 「安心して挑戦することができる場の工夫」

グループ通級の内容や役割を自ら決める際に発言しやすい環境をつくり、考えを発言したり、実行したりするなど、挑戦できる場を設定する。

② てだて2 「成功体験を実感できる振り返りの工夫」

グループ通級実施後、参加メンバー全員で感想やフィードバックをもらう活動を行ったり、動画を活用して客観的に自分の姿を振り返ったりするなど、振り返りを工夫することで、次の活動への意欲を高めることにつなげる。

3 第1次授業実践

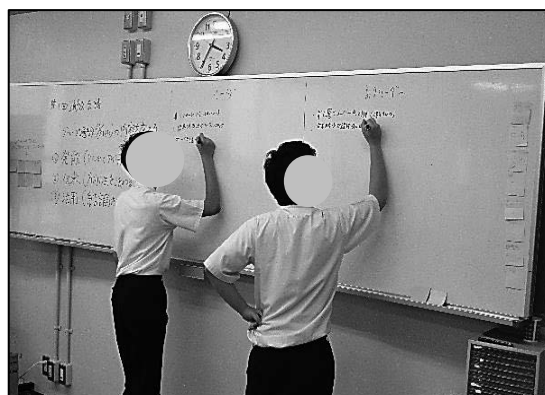
(1) 実践のねらい

自信をもち、活動に積極的にとりくもうとする意欲を高める。

(2) 実践の様子

① てだて1 「安心して挑戦することができる場の工夫」

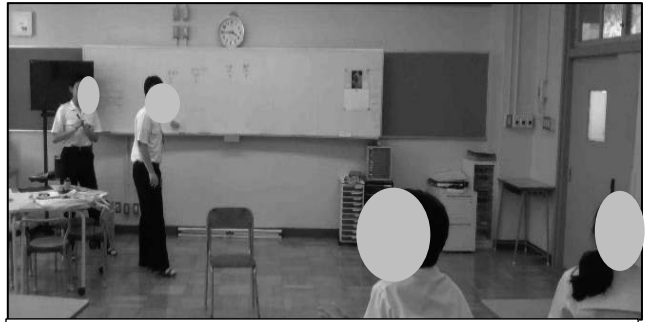
第1回グループ通級後に、AとBに、次回のグループ通級の計画やとり回しを任せたいということを伝えると、「最高学年だし、自分たちしかないよな」「そうだね。やってみるか」と二人ともやる気に満ちあふれた表情をしていた。後日ミニ会議を開き、グループ通級の計画を考えた。ミニ会議は、安心して発言することができるよう、ブレインストーミングを意識させ、否定をされない雰囲気をつくって自由に発言をすることができるようにした【写真1】。その中



【写真1】 ホワイトボードに案を書いている様子

から、2人で相談し、どれにするか絞っていった。内容は、具体的には決めず、次回のグ

グループ通級で課題が出るようにした。A・Bからは、「グループ通級が楽しみ」「不安もあるけどやり切りたい」という言葉が聞かれた。第2回グループ通級当日、A・Bは、自分たちで決めた内容をもとに、司会進行を行った。まずは、生徒Aが考えた「ジャストストップ」というゲーム(ストップウォッチを10秒で止め



【写真2】司会進行をする様子

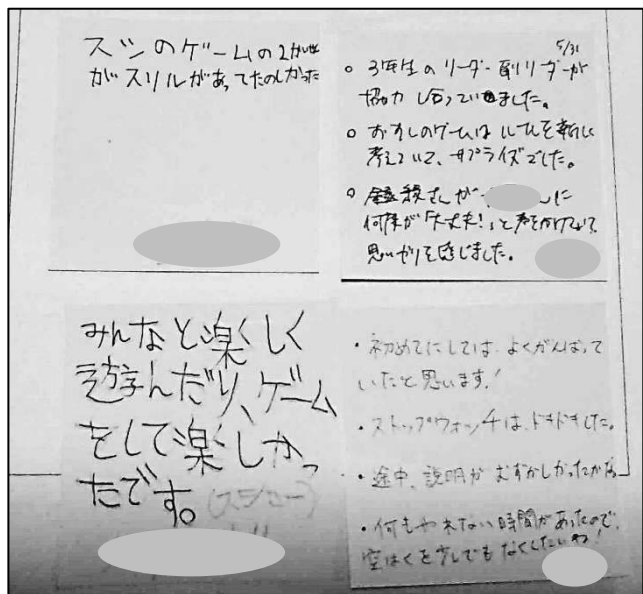
る)を行った。Aは緊張しながらも、説明をしたり、ホワイトボードに図を描いたりして、司会進行をした。途中、生徒たちからいくつか質問が出た際、言葉が出なくなってしまい、通級担当教員を見て助けを求めるような様子があったが、すぐにアドバイスをすることはせずに自分で考えるよう促すと、AはBと相談しはじめた。課題に直面したときでも、自分たちで責任をもってとりくむことができた場面だった。次は、Bの「スシポーカー」(通級指導教室にある教材で、順番にスシカードをとっていき、全員が5枚とったら終了。カードには点数が書かれていて、5枚の合計点を競うゲームである)を行った。Bは、説明書を読みながらゲームの説明をしたが、ルールが曖昧なままスタートし、途中で質問が出るたびに確認していたため、なかなかゲームをすすめることはできなかった。それでも最後までゲームの司会進行をやり切ることができた【写真2】。

② てだて2 「成功体験を実感できる振り返りの工夫」

グループ通級終了後、グループ通級に参加したメンバー全員が感想を発表する場面を設定した。参加した生徒からは、「楽しかった」「またやりたい」といった言葉が出た。それを聞いたA・Bはうれしそうな表情をしていた。また、付箋に感想を書き、振り返りシートの裏に貼るようにした。そうすることで、いつでも感想を見返せるようにした【写真3】。

その後は、「グループ通級振り返りシート」を用いて、振り返りの時間を設定した。A・B

ともに笑顔で「がんばりました」「やり切りました」と充実した様子だった。振り返りシートには、「よかったところやがんばったところ」「反省点(うまくいかなかったところ)」「次回にいかしたいところ」という観点で振り返るようにした。Aは、「自分で発明したゲームで勝つことができうれしい」「うまくしゃべることができなかった」「効率よくいろいろなゲームができるようにする」などと書き、Bは、「考えたゲームの説明がうまくみんなに通じてよかった」「新しく考えたゲームとかをみんなに理解してもら



【写真3】感想が書かれた付箋

い、実行したい」など書き、2人とも自分の行動を振り返り、次にかさそうとする姿がみられた。通級ミニ会議終了後も、二人は教室で話し合っていた。自ら主体的にとりくむ姿がみられた。

(3) 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 安心して発言することができる場を設定することで、自分たちの意見を出し合っゲームを考え、実行することができた。
- 役割を与えることで、自分たちで考え、達成したいという気持ちを高めることができた。
- 参加した生徒たちからフィードバックをもらうことで、達成感を得ることができた。
- 自分のやりたいことをやるだけにとどまってしまった。
- グループ通級での目標が明確でないため、どのようなところを意識してとりくめばよいか不明確で、目標を共有しにくかった。そのため、自分本位の行動が出てしまった。
- 振り返りの場面で、具体的な振り返りができなかった。
- 事前の準備不足でグループ通級での活動より説明の時間が長くなってしまった。そのため、グループ通級に参加している生徒の活動時間が短くなってしまった。

(4) 第2次授業実践にむけた改善点

ただ単に、自分たちがやりたい内容を実施するグループ通級ではなく、目標を明確にすることで、それにむかって主体的に活動にとりくむことができるようにしたり、振り返りをした際の評価をしやすくしたりする。さらに、動画を活用して自分の姿を客観的に見ることができるように工夫することで、振り返りをより具体的にできるようにする。そうすることで、積極的に挑戦しようという意欲を高めることにつなげることができると思う。

4 第2次授業実践

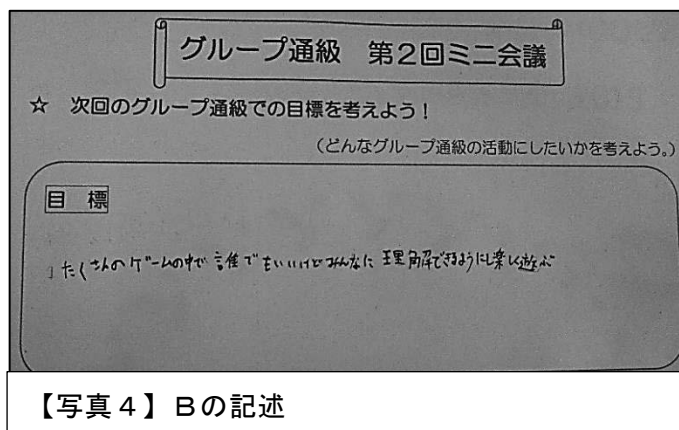
(1) 実践のねらい

活動の中心となって目標の設定をし、積極的にとりくむことができる。

(2) 実践の様子

① てだて1 「安心して挑戦することができる場の工夫」

通級ミニ会議の際、グループ通級での目標と個人の目標についてワークシートを使って考えるようにした。Bは、全体での目標を「みんなに理解してもらい、楽しんでもらえるようにしたい」とし【写真4】、個人目標は「個人の通級の時間に、通級担当教員と一緒に楽しく盛り上がるゲームを考えたい」と記述した。Aは、



【写真4】Bの記述

全体での目標を「みんなが楽しめるようにする」とし、個人目標は、「素早くゲームをす

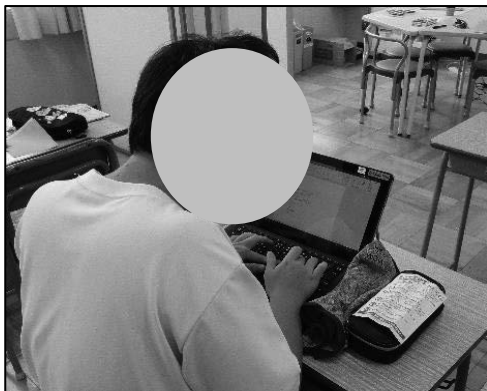
る」と記述した。互いの目標を確認することで、全体の目標が「みんなが楽しめるようにする」ということを意識することができるようにした。その後、グループ通級当日の内容について話合を行った。話合をすすめていくうちに、自分たちがやりたいゲーム、自分たちが勝てるゲームを考えるようになっていった。その際、通級担当教員から「グループ通級の目標は何だったかな」と問い掛けた。A・Bともに、「みんなが楽しむこと」と答えた。通級担当教員から再度、「A・Bが勝てて、楽しめるだけでは、目標は達成できないよね」と問い掛けると、Aは「じゃあ、グループ分けで力が均等になればいいんじゃない」と発言し、これにBも賛同して、グループ分けをすすめることができた。目標を設定し、ワークシートに記入することで、目標が明確になり、自分中心の考えではなく、グループ全体のことも考えることができるようになってきた。また、自分中心に考えが偏ってしまった際に、再度目標に立ち返らせることで、周りの生徒のことを考え、グループ全体の目標に意識をむけることができるようになった。

② てだて2 「成功体験を実感できる振り返りの工夫」

振り返りの時間に、グループ通級の活動を動画で撮影したものを視聴する時間を設けた。自分の姿を客観的に見ることで、次への課題を明確にし、よりよくしようとする意欲を高めることができるようにした。

Aは、動画を見て、「話が長いかな」と言った。Bは、「うーん」と悩んでいたのも、通級担当教員が動画の一部分だけ切り取り、「この場面みんなの様子はどうかな」と質問すると、Bは「退屈そう」「何もしていない」と答えた。次にいかせそうなことはないか聞くと、Bは「説明を短くする」と発言したので、通級担当教員が「説明を短くするとどんなよいことがあるかな」と問い掛けると、「みんなの活動時間が長くなる」と考えることができた。課題が明確になることで、次にどのようにとりくむとよいかが明確になった。また、動画で振り返る際、課題となる部分だけではなく、生徒たちのよかった点も振り返るようにした。自分たちで気付かない部分は、通級担当教員からよかったところを伝えるようにした。Aは、動画の中で、Bのサポートをしている姿がみられたり、Bは、以前より言葉が短くなり、説明がうまくなっていったりした。

さらに本実践においては、生徒が、自分・他者のよさに気付き、自分らしく生きていくための力を身につけるための支援をしているキャリアナビゲーターと連携してすすめていった。今回のグループ通級にも参加していただき、生徒へかかわってもらうように



【写真5】原稿を作成しているB

今日グループ通級で、バンス・オフをやります。⚡
今から説明をしますので、机をくっつけて下さい。⚡
遊び方を説明します。お手本を見て下さい。⚡
1カードを引きます。⚡
2ボールをトレーにバウンドして着地させます。⚡
ノーパンや入らなかったときは、やり直します。⚡
自分の手持ちのボールが投げ終わって無くなったら、トレーから1つ戻して使いましょう。⚡
3ボールが絵と同じ並び方になるようにねらって投げ入れましょう。⚡
4最初にボールをカード通りに投げ入れた人は、カードを自分のものに獲得できます。⚡
⚡
グループ分けをします。⚡
じゃんけんで決めます。⚡
勝った人は好きな番号を選ぶ。⚡

【写真6】Bが作成した原稿の内容

した。通級ミニ会議で振り返りをしている際には、「今のはリーダーシップがあるね。会社でもその力はいかされるね」「今、2人がやっていることは、今後働く上でとても大切なことだよ」など生徒の行動や発言を価値づけ、今の行動が将来につながっていることを理解させてくれた。生徒は、照れながらも笑顔を見せて次への活動に意欲的にとりくんでいる姿がみられた。また、休み時間に、キャリアナビゲーターの教室に集まり、自主的にグループ通級のための準備をするといった積極的にとりくもうとする姿がみられた。

その後、Bは、自主的にプレゼンテーションソフトの資料を作成し、当日の説明がわかりやすくなるように準備する姿がみられた。また、個人の通級の時間には、ゲームの説明の原稿を作成し、長くなりがちな自分の文章を通級担当教員と書き直す作業を行った。自分の課題が明確になったことで、課題解決にむけて挑戦しようと努力する姿がみられた【写真5・6】。

(3) 成果と課題 (○成果 ●課題)

- 目標を明確にし、課題にむけて、主体的にとりくむ姿がみられた。
- 自分の行動を客観的にとらえることで、課題が明確になり、次への改善の意欲を高めることにつながった。
- 動画で実際の様子を見ながら伝えることで、より達成感を味わうことができた。
- 自分に自信をもちはじめ、より積極的にグループ通級の活動にとりくもうとする姿がみられた。
- 通級担当教員以外の方に、参加してもらうことで、違った角度からの言葉掛けができ、生徒の積極性を引き出すことにつながった。
- 毎回のグループ通級後にミニ会議や準備を設定していたため、時間的に少し負担になっている部分があった。

5 通常の学級での様子

グループ通級実践後に、在籍学級の授業でもAとBに変化があらわれた。Aは、授業中に自分の考えを記述する場面でねばり強くとりくめるようになったり、以前は問題がわからないことに対してイライラしていたが、落ち着いてとりくむようになったりするなど変化がみられた。また、英語科の先生から、「最近、Aは、前向きにとりくんでいます。今までは発表しなかった英語のスピーチにも挑戦しています」という話があった。今まで発表など、自ら行うことがなかったAの成長が感じられた。他にも、「ペアで話し合う場面で、以前は発表をいやがり、トイレにこもることがあったが、最近は緊張しながらもペアの生徒と話し合いができるようになった」ということも聞いた。Bは、明るくあいさつをしてくれるようになったり、文章の最後が「～ですかね」だったのが、「～がんばります」と書くことが増えたりと、変化がみられた。また、普段、友だちとかかわることがなく、1人であることが多かったが、友だちとかかわろうとする姿がみられるようになった。下校時には友だちと一緒に帰る姿もみられ、自らかかわることが増えてきた。グループ通級でみんなの前で話す機会を設けたり、通級メンバーとのコミュニケーションを取ったりすることで通常の学級でも少しずつ自信をもって行動できるようになった。

6 研究のまとめ

自分の意見を否定されることなく、周りが受け入れてくれるような安心して挑戦できる場を設定したことで、活動に意欲的にとりくむことができた。また、A・Bが達成感を味わうことができるようにするために、グループ通級終了後に、感想を発表し合う場を設定したり、感想を付箋に書いたりする活動を行うなど、振り返りを工夫することで達成感が積み重なり、Aからは、「大変だったけど、やりきりました」Bからは、「がんばった。少し自信がついた」という発言が聞かれた。その他にも、目標を明確にする活動や自分の行動を客観的に見る活動を通して、課題が明確になり、次に挑戦しようとする意欲を高めることにつながった。Aは、「グループ通級に参加しているみんなと、通級指導教室の掃除をしたい」Bからは「グループ通級の内容を考えるだけでなく、通級に通うみんなで何か別の活動ができないか考えたい」といったような新たな視点からの発言が聞かれた。そこで、Bの発案から学校に貢献する活動（スリッパの整理整頓や普段掃除されていない場所の掃除）を行い、周りの生徒と協力して一生懸命活動する姿がみられた。【写真7】その際、校長からの激励の機会を設けることで、さらに生徒たちが自己効力感を高めることにつながった。今後も、生徒たちが通級の枠にとらわれず、通常の学級や学校に貢献できるような活動を行い、さらに自己効力感を高めていくことができるようにしていきたい。そして、生徒たちが自分に自信をもって、物事にとりくむことができるよう、成功体験を積み重ねることができる場を設定し、力を発揮できるようにしていきたい。



【写真7】